

VAN Gogh
AND STILL LIFE
FROM TRADITION TO INNOVATION

ゴッホと 静物画

伝統から革新へ
PRESS RELEASE



VAN Gogh AND STILL LIFE FROM TRADITION TO INNOVATION

ゴッホと静物画 伝統から革新へ

フィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890)は何を学び、何を伝えたのか……

本展覧会は、17世紀から20世紀初頭まで、ヨーロッパの静物画の流れのなかにゴッホを位置づけ、ゴッホが先人達から何を学び、それをいかに自らの作品に反映させ、さらに次世代の画家たちにどのような影響をあたえたかを探ります。また、本展覧会では「ひまわり」にも焦点をあて、ゴッホやその他の画家たちによる「ひまわり」を描いた作品もご紹介します。

本展は当館移転後の開館特別企画展として2020年に開催が予定されていましたが、新型コロナウイルス感染症拡大のため中止となり、このたび3年の時を経て開催の運びとなりました。

展覧会名 ゴッホと静物画——伝統から革新へ

Van Gogh and Still Life:
From Tradition to Innovation

会期 2023年10月17日(火)–2024年1月21日(日)

休館日 月曜日(ただし1/8は開館)、年末年始(12/28–1/3)

開館時間 10:00–18:00

(ただし11/17(金)と12/8(金)は20:00まで)

※最終入場は閉館30分前まで

会場 SOMPO美術館

〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1

<https://www.sompo-museum.org/>

新宿駅西口より徒歩5分

主催 SOMPO美術館、NHK、NHKプロモーション、
日本経済新聞社

協賛 SOMPOホールディングス

特別協力 損保ジャパン

協力 KLMオランダ航空、日本航空

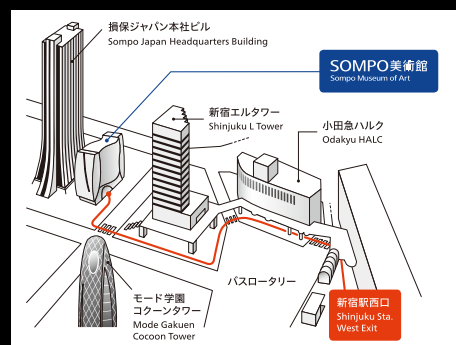
後援 オランダ王国大使館、J-WAVE、新宿区

総監修 千足伸行(成城大学名誉教授、広島県立美術館長)

監修 小林晶子(SOMPO美術館上席学芸員)

展覧会公式サイト <https://gogh2023.exhn.jp/>

お問い合わせ 050-5541-8600(ハローダイヤル)



SOMPO美術館
Sompo Museum of Art

事前購入券 8月16日(水)販売開始

観覧料(税込)	事前購入券	当日券
一般	1,800円	2,000円
大学生	1,100円	1,300円

* 高校生以下無料

* 身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳を提示のご本人とその介助者1名は無料、被爆者健康手帳を提示の方はご本人のみ無料

* 事前購入券は公式電子チケット「アソビュー」、ローソンチケット、e+ (イープラス)、チケットぴあなどでお買い求めいただけます

* 本展は各種割引制度の適用外です

展覧会のみどころ

EXHIBITION HIGHLIGHTS

1 《ひまわり》、《アイリス》をはじめ 25点のゴッホ作品が集結

国内外25か所からの出展作品全69点のうち、25点がゴッホによる油彩画

2 静物画を見なければ、ゴッホは語れない

画家が主観で描く静物画で、ゴッホは独自のスタイルを身につけた

3 17世紀から20世紀の静物画の流れのなかで、 ゴッホを位置づけ

名だたる画家たち(クラス、ドラクロワ、マネ、モネ、ピサロ、ルノワール、ゴーギャン、セザンヌ、
ヴラマンク、シャガールなど)の静物画とともにゴッホを紹介



フィンセント・ファン・ゴッホ 《アイリス》

1890年 油彩/キャンヴァス 92.7×73.9 cm
ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

白ユリと並ぶ純潔の象徴として、アイリスは聖母マリアと共に数多く描かれてきました。ゴッホもアルルやサン＝レミでアイリスを描いていますが、宗教的な理由よりも、ゴッホ自身が「互いに高め合う全く異なる補色の効果」と手紙に語ったように、黄と紫を対比させる色彩の試みとして描かれたと考えられます。画面右の垂れた花は、伝統的な花の静物画にも見られるものですが、《ひまわり》の構図にも共通しており、色の対比と共に《ひまわり》との関係をうかがわせる作品と言えます。



フィンセント・ファン・ゴッホ 《ひまわり》

1888年 油彩/キャンヴァス 100.5×76.5 cm
SOMPO美術館

ゴッホは南フランスのアルルで画家仲間との共同生活を計画し、ポール・ゴーギャンらを招きました。《ひまわり》の連作は1888年8月、ゴーギャンの部屋を飾るために描かれました。出品作品の《ひまわり》は、この時描いた「黄色い背景のひまわり」(ロンドン、ナショナル・ギャラリー蔵)をもとに、1888年11月下旬から12月上旬に描かれたと考えられています。ロンドン版の色彩や構図をそのまま用いた「模写」ですが、筆遣いや色調に微妙な変化を加えています。



本プレスリリース及び
「ゴッホと静物画—伝統から革新へ」展について
のお問合せ先

「ゴッホと静物画」広報事務局(共同PR内)
担当:三井

gogh2023-pr@kyodo-pr.co.jp

TEL 03-6264-2382

〒104-0045 東京都中央区築地1-13-1
銀座松竹スクエア10F

[執筆] 小林晶子(SOMPO美術館 首席学芸員)

[表紙図版]フィンセント・ファン・ゴッホ《アイリス》(部分) [裏表紙図版]フィンセント・ファン・ゴッホ《ひまわり》(部分)

VINCENT VAN GOGH

[1853-1890]

フィンセント・ファン・ゴッホ 略年譜

1853		3月30日、オランダのフロート・ズンデルトに生まれる。
1869	16歳	美術商ゲーピル商会で働き始める。
1876	23歳	ゲーピル商会を解雇される。イギリスで教師となる。
1877-1878	24-25歳	牧師を目指すのが1年で断念。ベルギーの伝道師養成学校で学ぶが、資格を得られず。
1879	26歳	ベルギーの炭鉱で臨時説教師となるが、過度な伝導を理由に活動を止められる。
1880	27歳	画家になることを決意。ベルギーのブリュッセルの美術学校に入学する。
1881-1882	28-29歳	オランダのエッテン、ハーグで素描を中心に制作。《麦わら帽のある静物》制作。
1883-1885	30-32歳	オランダ北部のドレンテ、両親のいたヌエネンで制作。
1885	32歳	ベルギーのアントウェルペンに移る。
1886	33歳	フランスのパリに移る。花の静物画を多数制作。《赤と白の花をいけた花瓶》制作。
1887	34歳	《罇》制作。
1888	35歳	南フランスのアルルに移る。「黄色い家」を借り、画家仲間との共同生活を計画、指導者としてゴーギャンを招待。 8月《ひまわり》の連作に着手。 10月〜12月、ゴーギャンと共同生活。《ひまわり》制作。 12月23日、ゴーギャンと口論の末、自ら左耳を切る。アルルの病院に入院。
1889	36歳	入退院を繰り返した後、サン＝レミ＝ド＝プロヴァンスの病院に移る。
1890	37歳	《アイリス》制作。 5月、サン＝レミからパリ近郊オーヴェール＝シュール＝オワーズに移る。 7月27日、オーヴェールの麦畑から、胸部をピストルで撃った状態で下宿先に戻り(自ら撃ったとされる)、翌々日の29日に死去(享年37)。

西洋美術と静物画の歴史

静物画とは

花、日用品(食器や書物など)、楽器、死んだ狩りの獲物や魚、食べ物(果物、パン、チーズ、お菓子等)など、生命を持たず動かない物を描いた西洋絵画の分野を静物画といいます。古代ギリシャ・ローマ時代から、事物をリアルに表現した絵画は存在していましたが、西洋美術史上、静物画がひとつの分野として確立するのは17世紀といわれています。

静物画の歴史

17世紀 静物画の成立

プロテスタント(教会の装飾はカトリックに比べて簡素)が台頭した17世紀のネーデルランド(現在のオランダ)では、それまで教会に飾られていた大型の宗教画に代わり、現世の事物をリアルに描いた小型の静物画が流行しました。

18世紀 静物画の展開

アカデミズムでは神々や人間の営みを描いた歴史画を最も高尚な分野とみなし、静物画は下位に位置づけられていました。しかし静物画の愛好者は多く、特に大航海時代に端を発する植物学への関心や園芸品種の開発は、花の静物画の発展につながりました。

19世紀 静物画の再生

19世紀中頃、フランスでは17世紀オランダの静物画を再評価する動きが高まりました。また新興ブルジョワジーの多くは、手ごろで理解しやすい静物画を好んで買い求めました。画家にとっても静物画は、対象を緻密に描くという点で、その力量が試される分野でした。

20世紀 近代絵画と静物画

19世紀末から20世紀にかけて、画家たちは絵画を絵の具におおわれた単なる平面と考え、本物そっくりに描くよりも、色や形を独立したものとしてとらえ始めました。たとえば人間の顔に緑を使い、四角形や三角形のみで風景を表すこともありました。描くものや配置を画家の意志で決める静物画は、こうした試みに都合の良い分野でした。

TRADITION

CHAPTER

I 伝統

17世紀オランダから19世紀

ヨーロッパの美術史の中で、静物画が絵画の分野として確立するのは17世紀のことです。市民階級が台頭し経済的に発展したネーデルランドやフランドル（現在のオランダ、ベルギー）で盛んに描かれ、身の回りの品々はもちろん、富の豊かさを示すような山海の珍味、珍しい工芸品、高価な織物などが描かれました。一方で、砂時計や火が消えたロウソク、頭蓋骨など、人生のはかなさや死を連想させる事物を寓意的に描き、人々を戒めるための作品も描かれました。



ピーテル・クラス (1597-1660) 《ヴァニタス》✿

1630年頃 油彩/板(樫) 40.0×60.5cm クレラー=ミュラー美術館、オッテルロー
© 2023 Collection Kröller-Müller Museum, Otterlo, the Netherlands



「ヴァニタス」とは人生のはかなさや死を連想させる事物を描き、虚栄を戒めるメッセージを込めた静物画のことです。この作品でも時の移ろいを示す時計、命の短さを象徴する火の消えたロウソク、美のはかなさを暗示する萎れた花など、ヴァニタスの典型的なアイテムが描かれています。中でも髑髏は死を表す代表的なモチーフで、「メメント・モリ(死を忘れるな)」の象徴として多くの作品に描かれました。



フィンセント・ファン・ゴッホ 《麦わら帽のある静物》✿

1881年 油彩/キャンヴァスで裏打ちした紙 36.5×53.6cm

クレラー=ミュラー美術館、オッテルロー

© 2023 Collection Kröller-Müller Museum, Otterlo, the Netherlands



人物を描く画家を目指していたゴッホは、はじめは静物画というジャンルを油彩の技術を磨くための「習作」とみなしていたようです。初期の静物画には、後に描くようになる花の静物画は数えるほどしかなく、瓶や壺、果物や野菜、靴、鳥の巣といったモチーフを、褐色や茶、黒を中心とする暗い色調で描いています。《麦わら帽のある静物》は、ゴッホ最初期の静物画で、油彩画に取り組み始めた時期の作品です。



フィンセント・ファン・ゴッホ 《^{どくろ}髑髏》✿

1887年 油彩/キャンヴァス 42.4×30.4cm

ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)

Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

SUNFLOWER

CHAPTER 2 花の静物画

「ひまわり」をめぐって

静物画の中で最も好まれる主題は「花」ではないでしょうか。花は人物と並んで人気の高い主題で、静物画の黄金時代である17世紀には花を専門に描く画家も活躍していました。ゴッホが活躍した19世紀、フランスの中央画壇では歴史画や人物画を頂点とした理念のため、静物画は絵画のヒエラルキーの下位に位置づけられていました。しかし花の絵の需要は高く、多くの画家が花の静物画に取り組んでいました。



アドルフ＝ジョゼフ・モンティセリ(1824-1886)《花瓶の花》

1875年頃 油彩/板 52.5×33.5cm クレラー＝ミュラー美術館、オッテルロー
© 2023 Collection Kröller-Müller Museum, Otterlo, the Netherlands

アドルフ＝ジョゼフ・モンティセリは南フランスのマルセイユ出身の画家で、肖像画や静物画、優美な貴婦人や貴公子が集う「雅宴画」で知られています。ゴッホがパリに到着した1886年に亡くなっていますが、ゴッホと弟テオはモンティセリを愛好し、その作品も収集していました。ゴッホは技法的に多くをモンティセリに負っており、パリで描かれたゴッホの花の静物画には、モンティセリの作品との共通点を見ることができます。

カスパル・ペーテル・フェルブリュッヘン(子)(1824-1886)

《果物と花のある静物》

1690-1700年頃 油彩/キャンヴァス 40.3×32.8cm
スコットランド・ナショナル・ギャラリー
The National Galleries of Scotland
※中央にひまわりが描かれています



Column ひまわりをめぐって

北アメリカ原産のひまわりは、大航海時代にヨーロッパに伝わり、その華やかさから17世紀の静物画に早くも描かれていました。一方、1888年に描かれたゴッホの《ひまわり》は、ゴッホの生前から彼自身が、そして同世代の画家や批評家が認めたゴッホの代表作で、画家の死後には「ひまわり」そのものが、ゴッホのアイコンとして描かれるようになりました。



フィンセント・ファン・ゴッホ

《赤と白の花をいけた花瓶》

1886年 油彩/キャンヴァス
65.5×35.5cm
ボイマンス・ファン・ブーニンヘン美術館、
ロッテルダム
Museum Boijmans Van Beuningen,
Rotterdam

ゴッホが静物画を、とくに花の静物画を数多く描くようになるのは、パリ滞在中(1886~1887年)のことです。ゴッホ自身も手紙のなかで、1886年の夏は「花しか描かなかった」と語っています。モデル代の不足という経済的な理由に加え、色彩の研究のために花の静物画に取り組んでいたのです。《赤と白の花をいけた花瓶》は、パリ滞在1年目にあたる1886年に描かれたもの。厚塗りの絵具や重々しい色調は、印象派よりもモンティセリの影響を感じさせます。



リヒャルト・ロラン・ホルスト(1868-1938)

「ファン・ゴッホ展」図録

1892年 リトグラフ/紙 18.0×21.0cm SOMPO美術館
※1892年にアムステルダムで開かれた「ゴッホ展」の図録表紙



ポール・セザンヌ(1839-1906)《りんごとナプキン》✿

1879-80年 油彩／キャンヴァス 49.2×60.3cm SOMPO美術館

「印象主義を美術館で飾られている作品のように、堅牢なものにしたい」と語ったポール・セザンヌにとって、画家が自由に対象を選択し、自らの意思で配置・構成することが出来る静物画は、格好の表現手段であったと考えられます。実際にセザンヌは初期から晩年を通じて多くの静物画を描いており、特に「りんご」を使った静物画を多数、制作しています。セザンヌ自身も「りんごでバリ中を驚かしたい」と、批評家に宛てた手紙の中で語っています。



ポール・ゴーギャン(1848-1903)《ばらと彫像のある静物》

1889年 油彩／キャンヴァス 73.2×54.5cm ランス美術館
Reims, Musée des Beaux-Arts ©Photo : C. Devleeschauwer

「絵画における事物の再現」という考え方は、印象派でピークをむかえたと言えるでしょう。「見たままを写す」という印象主義の考え方に疑問を抱いた画家たちは、色や形といった絵画の要素に注目し、それらを使っていかに二次元の絵画で自己を表現するかを追求し始めます。ゴッホ、ポール・ゴーギャン、ポール・セザンヌら「ポスト印象派」と呼ばれた画家たちは、静物画でも新しく自由なスタイルを展開し、その姿勢は20世紀の画家に受け継がれていきます。



モーリス・ド・ヴラマンク(1876-1958)《花瓶の花》

1905-06年頃 油彩／キャンヴァス 47.0×38.5cm メナード美術館
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2023 E5262

モーリス・ド・ヴラマンクは、ゴッホの影響を受けた代表的な画家のひとりです。1901年にフランスのバリで開催されたゴッホの回顧展で感銘を受け、「その日、父よりもゴッホを愛した」という言葉を残しています。1905年、ヴラマンクらゴッホの影響を受けた若手の画家たちが、チューブから絞り出した絵の具をそのまま用いたような作品群を発表、その強烈な色彩にちなんで、彼らは「フォーヴ(=「野獣」の意)」と呼ばれるようになりました。